

にぬき

かぶらや
鋪谷

こうし
嘴矢

梅雨だった。

九鬼周一は、朝からじめじめと降りしきる雨がぬらす歩道を、事務所の窓からながめていた。

彼の会社「有限会社ジャンク九鬼」は、大阪、日本橋一丁目のガルトップ一号店から少し奥にはいった雑居ビルの二階、コの字型に曲がった廊下の突きあたりにある。

空を覆う厚い雲のためか、まだ昼すぎだというのに、あたりは夕暮れ時のようにうす暗く、せわしなく行き交う人影は、黒くのつぺりとした紙人形の行列のように存在感がなかった。

だが、景色の陰鬱さに反して、九鬼の気分は悪くなかった。

半月前に、有名家電メーカーから発売されたポケット型ゲーム機を百個単位で仕入れることに成功して、そこそこ懐がうるおっていたからだ。

昨夜、苦勞して三百本仕入れた3Dアクション・アドベンチャー「魔の饗宴」も、クソゲーではあるが、そこそこ売れるだろう。

不良品の発生、生産ラインの不備など、様々な理由で、ハードに限らず、ソフトも最初から大量に販売されない。

だから、たちまち品不足になる。

そして、人より少しでも早く手に入れたい、という人種はどこにもいる。

そこに九鬼のような零細業者のビジネスチャンスがあった。

そういった品物を、コネと足を使って素早く手に入れ、五割増し程度の値段で売るのが、ジャンク九鬼の仕事だった。

もちろん、素人に直接売るのではない。品切れ確実の商品をネタに、客を呼び込みたい小売店に売るのが。

タイミンクだけが勝負の商売だが、長年の勘とコネやつてをうまく組み合わせると、結構実入りの良い商売になった。

大手パソコンショップ、ガルトップの新島から電話があったのは、六月十日の午前十時のことだった。

そのとき、九鬼は旧式の電気掃除機で事務所を掃除していた。

おかげで電話の音が聞き取れず、受話器をあげたのは十数回のコールの後だった。

「はい、ジャンク九鬼」

「おう、クキ。おれや」

受話器からガルトップの新島の声が流れ出る。

「新島さん、こんな朝から電話とはめずらしいですな」

「用事のあるときは、朝でも夜中でも電話するがな」

「ゲーム・キッズやったら、もう手元にはおまへんで」

九鬼は、先日さばいた超人気ゲーム機の名を口にした。

「そんな話と違うんや」

「なんですな」

「ま、簡単に言うたら、人助けやな」

「はあ、人助け？」

九鬼は口元を歪めた。新島の口から、するりと出てくる言葉とは思えない。新島は、人を蹴落とす事はあっても、人助けなどするタイプではない。

「そうや。ま、正確に言うたら、人探しや」

「それはあかん。専門と違うわ。俺はパソコン部品とかソフトを探るのが仕事や」

「まあ、話は最後まで聞かんかいな」

新島は覆い被せるように続けた。

「この起こりは、ある大学生が日本橋で、中古のエロソフトを買うたことやった」

「98用ですか？」

「そらそうや。ちよつと前まではエロといえは98やったからな」

この場合の98というのは、ウインドウズ98では、もちろんない。

NECが出していたPC9800シリーズのことだ。

パソコン黎明期の八十年代から、日本国内のシェアを独占してたNECのパソコンでは、早くからアニメオタクなどを巻きこんだ独自のエロソフト——当時は脱衣麻雀などの脱がせゲームが主流だった——が盛んに製造された。

NECは、自社に特化したOSを使っていたため、かなり初期型のマシンでも、ずっと後期のマシンでも、同じソフトを動かすことができたのだ。

それゆえ、ウィンドウズが世界の主流になっても、ごく最近までPC9800用のエロソフトは制作されていたのだ。

マニア達は、それらのソフトで遊ぶためだけに、古いマシンを後生大事に使い続けていたが、マシンのパーツが壊れたら、秒進分歩、あるいはドッグ・イヤーとまで言われるコンピュータ業界のこと、とてもではないが交換部品が手に入らない。

そういった者のために、オールド・パーツを探し出すのも、以前は九鬼の仕事だった。

ジャンク九鬼が、別名パーツ・デテクティブ——PDと言われる所以だ。

九十年代半ばになって、比較的良質なパソコン用エロソフトが、レビゲーム機などのコンシューマー・マシンに移植されるようになってからは、加速度的にエロソフトがウィンドウズ環境で制作させるようになり、旧型のパーツを探す仕事もめっきりと少なくなった。

そして、ついに数年前、NECも独自路線を辞め、自社のマシンにウィンドウズOSを載せるようになり、全てのエロソフトはウィンドウズに引越したのだった。

「それは、かなりレトロ調のソフトやったらしい」

「はあ、それで」

九鬼が気の抜けた声を出した。

「まあ、聞けや。ここからが肝心な点や」

新島が続けた

「その『妖精の花園』というソフトで、ひとつのイベントをクリアしたら、突然、実写の女の写真が出て来て、服を脱ぎだしたらしいんや」

「昔、よくあったタイプや」

「そうそう、よくあった奴や。ところがその学生、写真を見て、あつと驚いたんやな」

「なんです？」

「少しだけ興味を惹かれて鬼は尋ねた。」

「あられもない格好でパソコンの画面に浮かんでいたのは、その男の姉やったんや」

「それは……」

九鬼はどう言葉を継いでよいか迷った。

「災難ですな」

「いや、良かったんや」

「はあ？」

「実は、その姉は八年前から行方不明になっていた」

「なるほど」

「で、家族に見せても、やっぱり姉ちゃんや、ということになって大騒ぎになった。おまけに、クレジットに記載されてある日付は、その女性の失踪した頃と一致している」

九鬼はきつぱりと言った。

「つまり、古いソフト会社を引取って女の居所を探せ、と言わはるんでっか？そらあきまへんわ。無茶苦茶や」

十数年前には、雨後の筍のように日本橋でも大小のパソコン・ショップが生まれていた。

その多くは、ソフトも作り、機械も売るといふ、悪く言えばいい加減、よく言えば野心的な店ばかりだった。

だが、数年前、おそらくはWINDOWS95が広まり始めてから、ソフトの肥大化が始まり、資金力の無いショップは、多機能なソフトを制作することができなくなってしまった。

その結果、ハード、ソフト共に大手の寡占状態になっているのは、現在の、関東、関西を問わない共通の状況だ。

とにかく、ミニショップがソフトを作っていたのは、はるか昔の事なのだ。

「そこを何とか、お前やったらやってくれと俺は信じてるんや」

「はあ」

「詳しいことは、その家族から渡された資料——手紙みたいなもんやけどな——を見たら分かるはずや。後で持って行かせるから見えてくれ」

「まあ、やってみますわ。せやけど、わかりまへんなあ」

「何がやね」

「なんで、新島はんが、そんな一般家庭の問題を気にしはるんでき？」

「その娘の両親に、昔、どえらい借りを作つてしもうたからや。今回の調査でも返せるかどうかからんほどの借りをな……」

電話越しに伝わる新島の声は、初めて聞く真摯なものだった。

「わかりました。やってみますわ。でも、あまり期待してもらたらあきまへんで」

「わかってる。費用のことは心配せんでええ。全部わしが払うから。思いっきり調べてくれ」

「……そうしますわ」

「助かる。ほなら頼むで。ところでな——」

「なんでっか？」

「電話には、もうちょっと早く出えよ」

「氣いつけます」

「そうしい。そうせな、また前みたいに会社潰すことになるで」

九鬼は、一瞬、かつと頭に血が上がった。

だが、新島はそれにも氣づかないふうで、さらに言葉をつぐ。

「まあ、今度はお前一人の会社やから犠牲者はおらんやろうが……」

新島は言うだけ言って電話を切った。

九鬼はしばらく受話器をにらんでいたが、ため息をつくと電話に戻した。

資料は十分ほど届けられた。

持って来たのは、矢野朱乃^{あけの}だ。

「こんにちはあー」

元気いっぱい挨拶しながら、朱乃が飛び込んで来る。

朱乃は今年で二十一になる女子大生だ。アルバイトで、ガルトツプの販売促進係をしている。未来的なコスチュームに、ツンと突きでた胸と、すらりと伸びた足が眩しい。

「うちの仕事って、股下より股上で計った方が早そうなミニ・スカートと、ビニールブーツを履いて新製品を売ることなんよ」と、これは

朱乃自身の言葉だが、実際の朱乃は、派手な外見と健康的な美貌の割りに、知的な娘だった。

最初は、ガルトツプの苦情うけたまわりコーナーで働いていたのだが、頼まれて販促に移ったらしい。

望んで得た仕事ではないが、今は、週ごとに変わる派手なコスチュームを、彼女自身楽しんでるように見える。

ここ半年ばかり、朱乃は、新島との情報のやりとりの仲立ちをしてくれていた。

アルバイトに過ぎない朱乃を、なぜ新島が重要な情報のやりとりに使っているかは、恐ろしくて聞き出したことは無かった。

もし、二人の間に「特殊な事情」があればショックだからだ。

三十二歳、離婚歴ありで、八歳の子持ちの九鬼は、普段の言動からは考えられないほど、女に対してオクテだった。

朱乃の後ろ姿を見送って、九鬼は封筒を開ける。

中には、写真と手紙、そしてゲームのCD-ROMが入っていた。

行方不明の娘は、小林未由佳と言った。無事ならば、現在二十七歳になっているはずだ。

写真で見える限り、黒目がちの大きな瞳をした知的で美しい娘だった。とてもエロソフトのヌード映像のモデルをするようには見えない。

手紙にはまた、彼女の略歴が書かれている。

和歌山市で生まれ育った未由佳は、大阪市内にある短大に入学すると、親の反対を押し切って下宿生活を始めた。

最初の半年は頻繁に連絡があったものの、一年が過ぎようとしたころから連絡が途絶えがちになり、十四ヶ月後に行方不明となった。

慌てた両親が大学に連絡してみたところ、授業に出席していたのは、一回生の前期だけで、それ以降は、まったく大学に行っていないことが分かった。

級友に尋ねてみようにも、未由佳には親しい友人がおらず、同じ高校から進学した生徒に尋ねても、はっきりとした状況は掴めなかった。

どうも、娘は大学に行くというより、親の私達から逃れるために、大学を利用しただけのようです、とその手紙には書かれていた。

級友の一人が、背の高い男と一緒に歩く未由佳の姿を目撃していた、という未確認情報もある。だが、その男の身許は分からなかったらしい。

一応は、警察に失踪届けを出してみたものの、警察は何らかの犯罪が見えて来ない限り、本腰で調査などしてくれない。

興信所に調査を依頼したこともあったが、効果は無かった。

つまり、年の離れた弟がソフトで姉を発見するまでは、何の手がかりもなかったのだ……。

思いついて、腕時計を見ると、午後四時過ぎになっていた。

「もう起きてるやろ」

そう呟いて、九鬼は寺井豪一に連絡を取った。

寺井は、関西電気通信大学の学生だ。

学生と言っても、年はもう三十近い。

寺井の父、晃一は関西では名の知れた建築家だった。

母、雪乃は在阪の大手下着メーカーの部長として第一線で働いていて、キャリア・ウーマンの先駆者として、雑誌の取材を受けることも多い。

子供とのスキンシップに時間を割くことができなかった両親は、金銭に不自由させないことで、愛情の不足分を補おうとした。

だから、寺井は放任主義の両親のもと、漫画やアニメ三昧の幼年時代を送ることができたのだった。

内向的だったが、体が大きかった寺井は、特に虐められることも無く、自宅に揃ったアニメ、コミック・コレクションに群がる同級生達の中にあつて、凶らずもリーダーとして祭り上げられていたという。

高校一年の時、父親がガンで死に、母親はかねてからの不倫相手であった、大手保険会社の常務と再婚した。

勉強が嫌いで、高校を形だけ卒業した寺井はすぐに、日本橋のパソコンショップに就職した。

その後、半年間、いくつかの店を転々とした後、寺井は、大学に進学することに決めた。

仕事が相つきつかったらしい。

母親は、両手を挙げて賛成してくれた。

新しい父親は、その当時、今まで培ったコネを利用して衆議院議員に立候補して当選したばかりだったから、義理とはいえ、息子が無職でいるより大学生である方が都合が良かったに違いない。

寺井は、関西の私立大学を十五校ほど受け、

三校合格し、一番カリキュラムが楽そうな関通に入学した。

それから七年、寺井はまだ関通に通っている。

「なんやあ。朝早うから」

朝に弱い寺井の不機嫌そうな声が受話器から流れてきた。

「俺や」

「おう、九鬼はん、あんたかいな」

誰に対しても横柄な寺井も、九鬼に対しては、比較的丁寧な口をきく。

どこで情報を仕入れるのか、寺井は驚くほどの人脈と知識を持っている。

「あんた『妖精の花園』というソフトを仕っているか？」

九鬼は、挨拶もそこそこに聞いてみた。

「知らんな」

寺井はあっさり言い捨て、

「たぶん、二流どころのソフト会社が勝手に作ったエロソフトなんやろ。あるいは同人系かもしれない」

「いや、同人系やない。そうか、知らんか。分かった。邪魔したな」

礼を言っただけで電話を切ると、九鬼は傘を持って事務所を出た。もう一人会わねばならない男がいるのだ。そいつは、電話で話をするより直接会った方が話してくれる確率が高い。

ビルを出ると、九鬼は雨の中を新今宮に向かって歩き出した。

JR新今宮駅で大阪行きに乗り込み、大正駅で下車した。

いつもと桁違いの人の多さに、駅を間違えたかと、もう一度駅名を確認する。

壁に貼られた阪神巨人戦というポスターが目に入り納得した。

年に数回だけ行われる、大阪ドームの阪神巨人戦といきあたったのだった。

ドームへ向かう人波を横切って、九鬼は、櫻川方面に歩いていった。

十分ほど歩いた川沿いに、目的の男の勤める「A S企画」の入った雑居ビルがあった。

腕時計を見ると、五時過ぎだ。

階段をあがり、二階の突き当たりのドアをノックし、返事を待たずに開ける。

振り向いた、今時珍しい黒縁眼鏡の男が、目当ての男、各務良一だった。九鬼とは大学の同期だ。

「おう、九鬼。珍しいな」

「ちよっと夕飯でもどうや？」

「ヤルスクでか？」

「おう」

ヤルスクは駅から十分ばかり歩いた飲食街にある食堂兼居酒屋だった。

大阪一安い店だと評判の店で、何度か雑誌などでも取り上げられている。

その安さは伝説的で、ある時、始めてやってきた酔客が「この店で一番高いモン持ってこい」と叫んだら、ビール大瓶が一本出てきたという逸話があるほどだ。

「こんばんは」

暖簾のれんをくぐって店に入ると、狭い店内はほぼ満席だった。時計を見ると午後五時二十分。六時を回って店に來ると、まず座ることはできない。それほど根強い人気のある店なのだ。

仕方がないので、二人でカウンターに座る。

とりあえずビールを頼んだ。料理は適当に見繕ってもらおう。値段を気にしなくていいのがこの店の良いところだ。

「で、どんな話や？」

ビールを飲み、茄子の味噌田楽を平らげると各務が切り出した。

九鬼は、資料を渡し、新島から請け負ったソフト会社探しの詳細を各務に語った。

「同人や無いねんな」

各務も寺井と同じ事を尋ねる。

無理もなかった。現在、出回っているエロソフトや著名なアニメやコミックのキャラクターを無断使用した小規模ソフトの多くは、同人誌がらみで制作されているからだ。

「そのソフトは八年前のもんや。零細ソフトハウスがエロソフトを作っていた最後の頃やな」

資料をばらばらとめくっていた各務は、ぱたりとノートを閉じると言った。

「わかった。ちよっと心当たりがあるから、聞いてみるわ」

「ほら、これはサービスマン」

声と共に、カウンターの向こうから、突然揚げ出し豆腐が出てきた。

顔を上げると、今年七十五歳になる店主が、皺だらけの顔に満面の笑みを浮かべている。

「久しぶりやな、九鬼はん」

「おやっさん。ご無沙汰してます」

数年前、離婚したばかりの九鬼は、毎日ヤルスクで食事をしていた時期がある。

ある時、酔客のヤクザとひよんな事から口論になり喧嘩沙汰になった。

その時、体をはって、ヤクザを追い出したのが、ヤルスク店主、斉藤五郎だった。

「帰れ、ヤクザもんは、わしの店には入れへん」

長身ではあるが、枯れ枝のように痩せた老人が、出刃を持って切る啖呵には凄まじい迫力がこもっていた。

捨てぜりふを残して男が去ると、店主は、九鬼を座らせて言った。

「あんたもあかん。毎日暗い顔で、うちに來てるようやが、うちは楽しゅうご飯を食うところや、あんまり暗い顔ばっかりしたら、しまいに出入り禁止にするで」

その時以来、九鬼は、店主と親しく話をするようになった。

老店主は、一種独特の男だった。

斉藤五郎は、十九の年に兵隊にとられ、終戦を大陸で迎えた。

その後、シベリアの収容所で強制労働をさせられ、戦後、数年を経て帰国した。

この店の奇妙な名前は、強制収容所のあったクラスノ・ヤルスクから付けられている。

だが、帰国した斉藤を待っていたのは、共産主義に魂を打ったスパイだ、という疑いの冷たい目だった。

就職などもちろんできず、親戚縁者からは絶縁され、斉藤は絶望した。

多くの戦友が過酷なシベリアの重労働で命を落とし、自分も幾度となく死にかけた。かれ自身、足の小指を凍傷で無くしている。

斉藤を地獄から生還させたのは、生きて再び故郷の土を踏みたいという望郷の念、ただそれだけだったのだ。

夢に見続けた、愛するものから裏切られた斉藤は、怒りにまかせて暴れまわり、やがて愚連隊に入った。

すでに心が大陸で死んでいたかれは、どんなチンピラよりも命しらずな鉄砲玉だった。

そんな斉藤が変わったのは、五年前に死んだ女房をもらってからだ。つた。

「実は、わし、カミさんにツッコミしようとして知りおたんや」
以前に、ふたりの馴れ初めを聞いた時、斉藤は、そう言って笑った。

ある晩、上本町の寺博打で、あり金全部をすってイラついていた斉藤が、路地を曲がると、暗がりでもぞもぞと動く気配がした。

「なんじゃい」

声を掛けると男二人が振り向いた。独りは路地に立っていて、もう一人は、四つん這いになっている。

女を犯そうとしていた。

斉藤は、そのまま立ち去ろうとした。

当時、こんな光景は日常茶飯だった。関わりあう理由がなかった。だが……。

次の瞬間、斉藤は男達に飛びかかっていた。

女に馬乗りになっていた男が復員兵の格好をしていたことに腹が立ったのだ。クラスノで死に、永久凍土に葬られた戦友は女を知らなかった。

こんなクズどもに、女を抱かせるものか。

そう思った。

男達を、足腰が立たないほど殴りつけて追い払うと、斉藤はズボンを降ろして娘にまたがった。

気が高ぶっていた。

だが、横を向いている娘の顔を正面に向けさせた時、その意外なほどの美しさに斉藤は圧倒された。

「あんたもか……」

大きな眼で見上げる娘が掠れた声でそう言った瞬間に斉藤は萎えた。

のろのろと立ち上がると、娘の手を取って立たせる。

「なにしてんね。はよ服着んかい」

身繕いを終えた時、娘の腹が鳴った。

「腹が減ってるんか？」

問うと、娘は悲しそうに頷いた。

懐を探ると、財布の隅に小さく折り畳んだ札が引っかけかかっていた。

闇市に行き、その金で、二人してスイトンを食べた。食べながら、娘は、とつとつと身の上を話した。

沖縄出身で、終戦後、帰る国を失った娘は、事情こそ違え、斉藤と同じ孤独の身の上だった。

やがて、所帯をもった二人は、沖縄出身者が多く住む大正で食堂を始めた。

「収容所で一番の楽しみは食事やった。暖かい食い物さえあれば、その日は幸せな一日やったんや。せやから、わしは、とにかく安く、うまいものを食べる場所を作りたかった」

ある時、なぜ、無理をしてまで安い値段に執着するのか、と尋ねた九鬼に斉藤はそう答えた。

二日後、各務から連絡を受けた、ソフトハウスFTのプログラマーが見つかったという。

「よう見つかったな」

「ま、この業界、広いように見えて、ほんまは狭いからな。八年前からエロソフトのプログラムを組んどった奴やったら、数は知れてる。それに、あんたも分かっているやろけど、いっぺんこの業界の水飲んだら、他の職には就けへんからな。案外、簡単やった」

各務によると、安井というその男は、今は、本町にあるアド・システムというCADの会社に勤めているらしかった。

さっそく、電話でアポイントメントをとった。

向こうの提案で、本町「竹籤亭」で、昼飯を取りながら話をすることにする。

竹籤亭は、昔から、安くてうまいものを食べさせることで有名な大衆食堂だった。

九鬼も、行ったことはないが名前だけは知っている。

実際に行ってみると、昔のデパートの大食堂が、そのまま地下に潜ったような感じの広い店だった。

午前十一時過ぎなので、広い店内はまだ空いている。

「ああ、ここです」

目印に、ガルトップの大きな袋を下げていた九鬼を、目ざとく見つけて、ひげ面の男が手を挙げた。

「安井さんですか？」

近づいて聞くと、男は頷いた。

「そうです。九鬼さんですね。この暑いのに、お通夜みたいな黒服でつか。まあ、お座りください」

安井は四十年輩の小太りの男だった。

長髪を後ろで一本に束ねて、似合わぬピアスを耳につけている。

「さきに用件をすませてしまいまひよ」

座るなり安井が言った。

九鬼は、紙袋からソフトのパッケージと、写真を取り出して安井に渡す。

写真を一目見るなり、安井は言った。

「ああ、これはサキちゃんや」

「詳しいこと、教えてもらえますか？」

「ええですけど……」

安井は狡そうな目になって、九鬼を見た。

九鬼は、あらかじめ用意しておいた封筒を紙袋から取り出した。黙ってテーブルの上に置く。

安井は、素早く封筒を内ポケットへしまった。

「すんまへんな。娘が今度小学校に入りますので、何かと物いりなんですわ」

「大変ですなあ」

しかし、その後の安井の話からは、特に役立つ情報はなかった。當時を知る人間を紹介されたのが唯一の収穫だった。

安井と別れると、九鬼は、地下鉄中央線に乗って大阪港駅に向かった。

駅を出て、巨大な観覧車を右手に見て歩くと、目指すベル・メゾンまでは十分とかならなかった。

手に持っていた黒い上着を羽織る九鬼の表情は暗かった。

死んだ友人の三回忌は、メゾンの一階にある集会所で行われているはずだった。

「何しに来たんや！」

顔を見るなり友人の父親に殴りかかられた。

「ちよつと、お父ちゃん」

三十過ぎの姉が間に入って止める。

「勝久はお前に殺されたんじゃない。どの面下げてここに来た！」

叫ぶように言うと、さらに殴りかかる。

何事かと、集まった人々の好奇の目が注がれる中、九鬼は、されるままになっていた。

「ご焼香だけでも、させていただきたいんです」

「いらんわ。お前なんか来ると、勝久は成仏でけへん」

娘に腕をとられて、殴るのをやめた父親は、突き飛ばすように九鬼押し返すと後ろを向いて言った。

「胸クソ悪い。塩まいとけ」

「すんません。お父ちゃんは気が立ってるんですわ」

九鬼の肩を押して、建物の角まで誘導すると、女は言った。

「いや、お父さんが怒らるるのも、もつともなんです。何言われても仕方ないですわ」

「でも、あんたも気がきかんねえ。なんでやって来るの？家族の神経逆撫でするだけやのに。勝久が死んで三年やけど、まだお父ちゃんは、あの子の部屋を片づけてないんよ。陰膳もしてるし」

「……」

「お父ちゃんにとって、あんたは勝久を殺した犯人なんや。うちはそうは思わへんけど……」

九鬼は黙っていた。

「でも、あんたの無責任な計画で、弟が自殺したのは事実や。せやかろうちも、あんまりあんたには来て欲しないんや」

九鬼は黙って頭を下げると駅に向かった。

途中、海遊館へ向かう楽しそうなカップルとすれ違う。

こうなることは分かった。でも、来ない訳にはいかなかった。肩を落として歩く九鬼の背に、梅雨空から雨が降り始めた。

九鬼周一は、大阪の私立高校を出て、京都の大学に進んだ。

電子工学を専攻し、卒業すると、関東に本社のある大手通信電気メーカーに就職した。

だが、仕事は退屈で、人間関係は鬱陶しかった。たちまち九鬼は会社がいやになった。

そこで知り合ったのが山田勝久だった。

勝久は頭の回転が速く、一をいうと十を知る男だった。

二人は最初からよく気があった。

三年後、二人は会社を辞めてソフト開発の株式会社を設立した。

資金は、それまでに貯めた金と、親や親戚に借金をして作った。

技術力には自信があった。今まで勤めていた大企業のソフト部門より良いソフトを作ることができるという自負もあった。

だが、仕事は全くなかった。

収入はゼロに等しかったが、毎月の支払いは容赦なく迫ってきた。だが、二人とも営業に出ようとはしなかった。

ただ、職業別電話帳を見て、自分たちを売り込むダイレクトメールを出して祈り続けるだけだった。

きつと、運が向いてくるはずだ。九鬼は言って、勝久を励ました。

ある日、勝久が言った。

「もうあかんわ。会社もおしまいや」

「……そうか」

別に驚かなかった。

九鬼には、何も言えなかった。

そうなるのは分かっていたからだ。

分かっていたが、気づかぬ振りをしていたのだった。逃げていたのだ。

「本当言うたら、俺、借金で首が回らへんね」

そう言っつて、勝久は、個人の名で借金をして会社の支払いに充てていた事を告げた。

「俺が社長やからな」

だが、それはくじ引きで決めただけのことだ。そう言っつと、

「ええんや。ともかく俺の責任やから」

「何でやね。どれくらい借金があるんや」

「俺、個人の借金や、これから働いて何とかするわ」

「そんなにひどかったんか……」

「お前も、今までの収入で家賃とか出たとは思ってへんやろ？」

そう言われて、九鬼は一言も反論できなかった。

「ともかく、二、三日のうちに荷物を運びだして、事務所を引き払おう」

そして、勝久は死んだ。

事務所を処分して二日後に、バイクでふらりと出かけた白浜で、三段壁から落ちたのだ。

死んだ後で、借金が二百万ほどあるのが見つかったが、勝久の父親は、保険で支払うから二度とうちに近づくな、と言った。

それから今まで、何度か家を尋ねているが、いつも同じように追い返されている。

事務所に帰ると、留守番電話が入っていた。

再生すると、別れた妻の声が流れ出した。

「周平さん。お久しぶり。わたしです。長々と挨拶する仲でも無いと思うので、用件だけ言わせてもらいます。もう娘に会わんといて欲しいんです。あの娘も、毎週ファースト・フードやファミリー・レストランで、同じような食事をして、話したくもない学校の話をするのを嫌がってます。今日、弁護士さんに頼んで作ってもらった書類を送りました。印鑑を押して送り返してください」

再生が終わると、九鬼は溜息をついた。

相変わらず、気の強い女だ。

だが、かれに怒る権利は無かった。

勝久が死んで、借金だけが残った時、必死になってそれと闘ったのは妻だったからだ。

彼女は、新しく職を探すわけでもなく、呆然と毎日を過ごしていた九鬼に不満を漏らさずに、ただ必死に働いていた。

そしてある日、突然、離婚を申し出られたのだった。

それで、九鬼は眼が覚めたが、すでに遅かった。

一度、離れた心は戻って来ず二人は離婚した。

妻と別れるのは、そう辛くは無かった。

その時、すでに妻に男の影があることに気づいていたからだ。ただ娘と暮らせないのが悲しかった。申し合せて、一週間に一度でも娘に会えるのが救いだった。

それを、今さら、会うなと言われるのは辛い。

最近、娘があまり嬉しそうにしていることは知っていた。

しかし、その理由が、安い店ばかり連れて行かれることだったとは気づかなかった。

そういうものか、かれは呟いた。

九鬼は、しばらく壁を睨んでいたが、やがて深呼吸をすると、今日知った情報を整理し始めた。

新島は、こと仕事に関しては完璧を求める男で、金も出すが口もだすというクライアントだ。今回も、正確な報告書を求めるに違いない。

翌日、事務所に出ると、メールボックスに分厚い書類が届いていた。差出人は、佐川弁護士事務所とある。妻の雇った弁護士だろう。九鬼は書類をそのままゴミ箱に突っ込むと、昨夜、まとめた書類を持って街へ出た。

難波まで歩き、地下鉄御堂筋線に乗って、新大阪まで出た。

安井の話では、小林未由佳の消息は知らないが、当時、付き合っていたプログラマーの名を知っているということだった。

その男は、今、新大阪のシステム保守の会社で働いているらしい。まったく……。地下鉄の窓を横切るコンクリートの柱を数えながら九鬼は思った。

ゲーム・プログラマーって奴は、どうしようも無い人種だ。少しも一つ所にじっとしていない。

阪田というその男も、今の会社に落ち着くまで、五回以上、職場を変わっていた。

会社で阪田を呼び出すと、すぐに出てきた。

汗くさいシャツと髭面で、何日か缶詰になっている様子だ。ソフト開発も詰めに入っているに違いない。

「今、よろしいんですか」

「かまいませんよ。どうせ、耐久試験中だから。新人でもできる」

「そうですか、じゃあ、近くの喫茶店でも行きますか？」

「ご飯の方がいいな」

「行きましょう」

時計を見ると、午前十時過ぎだったが、別に驚きはしなかった。

阪田は一度奥に引っ込むと、よれよれのジャケットを引っかけて現れた。足下は社内用のサンダルを突っかけたままだ。

「ところで、お話というのは？」

窓から新幹線が見える、魚十という食堂の隅に座り、豚カツ定食を食べた後で、阪田が切り出した。

「昨日、電話でも、ちょっとお話させてもらんですが、私、小林未由佳さんを探してるんです」

「そうでしたね。でもそんな人は、知りませんよ」

電話で話した時から、どうも阪田の言葉は妙だと思っていたのだが、この時になって、九鬼は、それが、言葉遣いが標準語で発音が関西弁であるからだということに気づいた。

「多分、その頃は、サキさんと名乗ってはったはずですよ」

「ああ、サキちゃんね。懐かしいなあ」

そう言って、阪田は靴を抜いてで足を組んだ。靴下の踵には、大きな穴が空いている。

「付き合っってはったとか」

「誰がそんなことを……」

「安井さんですわ」

「ああ、あいつか。元気にしてましたか？」

「ええ、今度、娘さんが小学校に入学されるんですよ」

「へえ、娘がねえ。こっちが年いくわけだ」

「それでサキさんの事ですけど」

「ああ、彼女、今行方不明なの？やっぱりね」

「やはり？」

「あのFTって会社は、なんかおかしかったんですよ。まあ、零細ソフトハウスなんて、いずれにせよ奇妙なものでしょうが、あそこは特別だった。社員は、最初、僕と安井の二人だけだったのが、途中からサキちゃんが入って、ほとんど入れ替わりに安井が辞めたし。社長ってのが妙に金を持っている若造だったし、そいつが、まだほんの小娘にハイコラしてるしね」

「社長って、吉村って男ですわね」

それはこれまでの調べで分かっていた。

「違いますよ。それは名目上の社長です。まあ、あの人はあの人で、結構おもしろい人だったんですけどね」

「おもしろい？」

「もともと近視だったみたいなんですけど、左目だけ極端に老眼が進んでるんですね。だから、裸眼の時は、顔を極端に左に向けて新聞なり書類を見るんです」

阪田は体を半身に開いた珍妙なポーズを取った。

九鬼は相槌を打ったが、聞きたいのは、そんな話では無い。

「で、実質の社長っていうのは」

「別に若社長ってのがいたんですよ。かれが若すぎたから、別に吉村社長を立てたんじゃないかな」

九鬼は先をうながした。

「それでね、安井の奴、勘違いをしていると思うんだけど、俺はサキちゃんと付き合ってますでしたよ。だって、サキちゃんは社長のコレだったんだもの」

そう言って小指を立ててみせる。

「若い方の社長ですね？」

「そうです。でも、サキちゃんは社長のことを好きだったというより、金のために付き合ってるだけのように僕には見えただな」

「それで、その若社長の名前は何て言いました？」

「えーと、それがね。僕たちは、ずっとトドって呼んでいたんで、本名の方はちょっと……なんて言ったかな……」

阪田は、太い鼻柱を指で搔いた。

「トド？」

「ごっつい体して太ってるんですわ。トドみたいだね」

「岡田さんに聞いたらわかりますね？」

九鬼が尋ねると、

「いや、あいつはトドの事は知らんでしょう。トドが会社に頻繁に顔を出すようになったのは、あいつが辞めてからですから」

「何とか思い出してもらえまへんか？」

そう言って、九鬼は内ポケットから封筒を取り出した。

思いついて、名刺をそれに重ねる。

「早く思い出すように、最大限に努力します」

すぐに中身を察した岡田は、露骨に嬉しそうな顔で言った。

夕方、梅雨の影響か急に気温が下がった日本橋を足早に歩いて事務所に戻ると、扉の前で朱乃が待っていた。

朱乃は、廊下を近づく九鬼に気づかなかった。

声を掛けようとしたが躊躇する。それほど朱乃は元気が無かった。背中を丸め、窓から外をじっと眺めている。

すぐ近くまで行くと、やっと気配に気づいて朱乃が振り向いた。

「どないした？」

九鬼は、わざと明るい声を出した。

「おかえり……」

朱乃は元気な声を出そうと努力していたが、成功したとは言えなかった。

冷え切ったエンジンは急に回転数を挙げようとしても、悲鳴をあげるだけだ。

「なんや急に寒うなったな。まあ、中に入って。コーヒーでもいれるわ」

言いながら、ポケットから出したキーで、あちこちにつけられた鍵を開ける。

取られるものは別にないが、ピッキング対策に鍵は三重につけてある。

「新島さんに言われて、書類を取りにきたんです」

部屋に入ると、朱乃はミニ・スカートの裾を引っ張りながら言った。

「ああ。そろそろ来ると思ってたわ」

九鬼はソファに鞆を置いた。

事務所の隅、小さくパーテーションで区切られた流しでコーヒー・

サーバーを用意する。

「ちよつと待っててな。わたす前に、今日、新しく分かった事を書き足すから」

「はい。あの、コーヒー、うちが煎れます」

「え。そうかあ……」

不安げな九鬼の顔に気づいて、朱乃は笑った。

「あ、九鬼さん、心配してるでしょう。大丈夫ですよ。こう見えてもコーヒーは大好きで、家でもネルドリップで煎れてるんですよ」

「ほな、頼むわ」

道具の場所を指示し、小汚い事務所にあつて、これだけは立派なオ
ーク材の机に座る。

前の会社を立ち上げた時に、勝久と二人で買ったものだ。
かちやかちやとガラスが触れあう音を聞きながら、さつき仕入れた
ばかりの岡田の話を入力し、レーザープリンタで印刷した。

書類をまとめる頃には、事務所に煎れたてのコーヒーの香りが溢れ
はじめていた。

神妙な顔つきで朱乃がコーヒーを運んで来る。

「熱いですから、気をつけてくださいね」

「おおきに」

一口飲んで、カップを机に置くと、印刷が終わった資料をクリップ
で閉じて、A4サイズの封筒に入れる。

どっかりと椅子に腰を下ろした九鬼は、向かいのソファに座って、
黙ったままの朱乃を見つめた。

「……どないしたんや？」

九鬼の問いに、カップを両手で抱くようにコーヒーを吹いていた朱
乃は、つと顔を上げた。

唇が、オウの発音をする時のようにすぼまっている。

いや、キスする時のように……か？

何考えてるんや、俺は。

そう思つて九鬼は苦笑した。

「なんです？」

「いや、なんか元気なさそうやな」

「……そんなことあらへんわ。うちはいつも元気！」

「そうか……ところで、今日、仕事は何時までや？」

「六時までですけど？」

九鬼は時計を見た。午後五時過ぎだ。

「大正にな、汚い店やけど、安うてうまいもん食わせるところがある
んや。一緒に晩飯に行かへんか？」

朱乃の顔がぱつと輝いた。

「わあ、九鬼さんが食事に誘ってくれるなんて夢みたいやわ」

「なんでやねん」

「嫌われてると思てたから」

「え？」

「せやかて、九鬼さん、こんなイケイケのカッコする女、嫌いやろ。前に聞いたわ」

「イケイケって、それは仕事用の服やないか」

言いながら、九鬼は彼女の私服姿を見たことが無いのに気づいた。

「まさか、普段もそんなカッコしてるんか？」

突然、朱乃がかがみ込んだ。体を震わせる。

「ど、どないしたんや」

返事がない。

「おい」

近づいて、肩に手を掛けようとする、朱乃が急に頭を上げた。涙を流して笑っている。

「そんな心配そうな声出さんでも……。ほんまに九鬼さんってエエ人やわ」

「なんじやい。笑うてたんか。脅かすなよ」

まだ笑いが止まらない

「うちが普段どんなカッコしてるかは、もうすぐ分かりますやん」
涙をぬぐいながら朱乃は言った。

「え、ああ。ちゆうことは、いけるといふことやな」

何度も頷く。

「よしよし、そしたら、仕事が終わったらここに顔を出して」

「はい」

六時十五分にノックがあった。

扉を開けると朱乃が立っていた。

ジーンズに白いTシャツ、白いスニーカーというシンプルな出で立ちだった。

「なるほどなあ」

九鬼は唸った。

「なに關心するん？」

「いつも、そんなカッコなんか？」

「そう。楽やもん」

「安心した」

あらかじめ、電話で話をつけておいたおかげで、七時というもつとも混む時間帯にも関わらず、二人は席につくことができた。

すぐに斉藤五郎が飛んでくる。席の確保を頼んだ時、渋る親父を説得するために、女性同伴で行く、と言ったからだ。

それから、斉藤五郎の独壇場だった。

他の客を、ほとんどほったらかしにして、朱乃に話しかける。何のために二人で来たのか分からないほどだ。朱乃は良く笑い、食べた。

「あの娘は、エエで」

朱乃を大正駅まで送って店に帰ると、老店主は言った。

「離したらあかん」

「別にそんな仲やあらへんがな」

「とにかく、年寄りの言うことは聞いといたらええんや。逃げたら追いかけるんやで」

「俺はストーカーかい？」

憎まれ口を叩きながらも、九鬼は、朱乃が斉藤五郎の眼鏡に合ったのが嬉しかった。

人生は、様々な糸を織り込んで出来上がっていく織物に似ている。

朱乃のことは、九鬼にとって眩しい銀色の光だった。だが、人生、明があれば暗もある。美しい糸の後には、きまっつとす黒い緋色の糸が織り込まれる。九鬼はそのことを忘れていた。

その夜、九鬼周一は、突然襲われた。

店が終わってから、ヤルスクの親父に捕まって酒に付き合わされ、タクシーで事務所に戻ったのは深夜一時を回っていた。

三重の鍵を事務所にかけ、外に出ると梅雨は中休みなのか、雨は降っていないかった。

酔い覚ましをかねて、桜橋にある自宅マンションまで歩いて帰るところにする。

ナンバシティを過ぎ、JRなんばへ向かう。

河合塾を横手に入った細い道で、九鬼はいきなり襲われた。

大きな男が路上駐車の車の影から現れて、殴りつけて来たのだ。腹を殴られ、息が止まった所で、襟首を捕まれて引きずり倒された。後は、ただ蹴りまくられる。

九鬼にできることは、体を丸めてダメージを少なくすることだけだった。

「なんでこんな目にあうかは分かってるやろな」

男は、ドスの利いた声で言う。

「女に執着するんはみつともないで。はよ手を引けや」

もう一発脇腹を蹴った。

「わかったな」

苦痛に声も無い九鬼を残し、男は去っていった。

怪我の後遺症で、翌日から三日間、九鬼はマンションで寝て過ごした。

当日よりも二日目、二日目より三日目の方が体が苦しかった。

だが、調査から手を引くつもりはなかった。暴力を受けた時は恐ろしかったが、後から生じた体の痛みは、恐怖よりも憎しみを生み出したのだ。

怯えそうになる自分に対する憎しみだ。

困難から逃げたくは無かった。

前回は、逃げたために勝久を殺すことになったのだ。

「今度は、逃げへんのか」

だが、口に出してそう言ったのは、恐ろしいからだということには、自分でも気づいていた。

四日目に九鬼は起きあがることができた。

あれ以来、阪田から連絡は無い。

あるいは、全力で思い出させるには、現金が足りなかったのかもかもしれない。

そう思って、もう一度、新大阪を訪ねようと思った矢先、九鬼は、阪田の顔を新聞で見つけた。

寝ている間にたまった新聞を、まとめ読みして見つけたのだ。

阪田は死んでいた。

三日前の早朝に、新大阪の例のビルの屋上から飛び降りたのだ。警察は、争った痕跡がないため自殺と考えていた。

新聞の記事では、阪田は汗くさくもなく、踵に穴の空いた靴下もはいて居なかった。

三日前まで生きて歩いていた男は、たった十行の記事に収まっていた。

四日ぶりに事務所に出た九鬼は、パソコンを立ち上げた。

さっそくメールをチェックする。

二百通ほどのメールがたまっていた。ほとんどがスパム・メールだが、九鬼は、その中に阪田という名を見つけた。

死者からのメールだった。

阪田のメールの内容は簡潔で、例のトドの名前はわからなかったが、一枚だけ忘年会で撮った写真が残っていたので、添付ファイルで送るといふものだった。

残念ながら、トドはカメラを構えているので写っていないが、何かの参考にして欲しいと、追伸にある。

送信の日付は、九鬼が訪ねた日の深夜になっていた。

ビットマップ形式の添付ファイルを開くと、画面一杯に写真が広がった。

大きすぎて、何が写っているか良くわからない。

九鬼は、画像ソフトを使って解像度を変更し、画面に収まるようにした。

どこかの事務所で撮った写真のようだった。

殺風景なネズミ色の壁の前に、全部で四人の男女が写っていた。全員が、胸元に妖精の絵が描かれたお揃いのTシャツを着ている。

一番端に写っている美しい女性は、小林未由佳だった。

その隣に阪田が写っている。

そのとなりの眼鏡を掛けた痩せた老人が、名目社長の吉村だろう。

そして……。

九鬼の瞳は驚きで大きく見開かれた。

「そんな馬鹿な……」

拡大ツールを使って写真を大きくする。

カーソルの指し示す先にあどけない顔をした矢野朱乃の姿があった。

いまよりずっと若く、子供の顔をしているが、朱乃に間違いない。

「そう言えば……」

不意に阪田の言葉が脳裏に甦った。

『社長つてのが妙に金を持っている若造だったし、そいつが、まだほんの小娘にヘイコラしてるしね……』

九鬼は新島に連絡を取った。

「おう、九鬼か。その後どうや？」

「ゆっくりですけど、確実に進んでますわ。進捗は渡した資料に書いてあるはずですよ」

「何のことや？」

「朱乃に渡した資料ですがな」

「何の話や。朱乃ちゃんには、いっぺん資料を持っていつでももうただけやで」

九鬼は礼を言って電話を切った。

溜息をつく。

これで朱乃に対する疑いは確実なものになった。

九鬼は、画像をプリントアウトして鞆に入れた。

ガルトップに出かけると、三日前から、朱乃は仕事を休んでいた。

新島に会って朱乃の住所を聞き、弁天町に向かう。

タクシーを市岡中学前で降り、朱乃の住むシンシア・ハイツ弁天を搜した。

それは、その地域でも、ひととき目立つ豪華なマンションで、すぐに見つけることができた。

メール・ボックスには、朱乃の名前だけが記載されている。

八階で降りて、長い廊下を歩くと、突き当たりに矢野朱乃の表札を見つけた。

「どなた」

インターフォンを鳴らすと、聞き慣れた朱乃の声が答えた。

「九鬼や」

「……ちよっと待って」

しばらく待たされて、扉が開いた。

一瞬、身構えるが、玄関に立っていたのは朱乃一人だった。

濃紺のスカートに白いブラウスが清楚な雰囲気を出していた。

右手首に巻かれた赤いバンダナが可愛い。

嬉しそうに笑って言う。

「会いに来てくれたん？うち休んでたから」

九鬼は立ったまま、無言で鞆を開けると、黙ってプリントアウトした画像を取り出した。

写真を見た途端、電撃に打たれたように朱乃は震え、

「これはうちやない」

かろうじて、そう言った。

「ほんなら誰や？」

「知らん」

九鬼は朱乃の顔を見た。真つ青な顔をしている。

「とにかく、中に入って」

朱乃に促され、九鬼は靴を脱いだ。

毛足の長いカーペットを歩いて、三十畳近くある居間に通された。

壁一面に設けられた窓からは、大阪港の大観覧車やUSJの施設が

霞んで見える。

「贅沢な生活やな」

「そんなこと言わんといて」

「お前は何者や？なんでこんな生活ができる？」

「私は矢野朱乃」

「それは分かってる」

「父の名は矢野哲治」

聞いたことのある名前だった。

と、思った瞬間、稲妻が九鬼の頭を走った。

「母の名は……」

「寺井雪乃か」

矢野哲治は、強力な関西の経済力を背景に、今では与党の重鎮と目されている政治家だった。つまり、寺井豪一の義父だ。

「大金持ちなわけや」

九鬼の言葉に朱乃は身を縮めた。

「うちやのうて、お父ちゃんが金持ちなんや」

「けど、育ちの割りに言葉遣いが悪いな」

「うち、美波と違うて、新しいお母ちゃんとそりが合わんかったから、おばあちゃんに育てられてん」

「みなみ？」

「矢野美波、うちの姉ちゃん。うちらは双子やったんや」

「そしたら、この写真は？」

「姉ちゃんや」

「どういうことなんか話してくれ」

「姉ちゃんは……」

朱乃は、寒気に襲われたように身を震わせた。

「悪魔や」

「角でも生えてたか？」

九鬼の混ぜっ返しを無視して、朱乃は続ける。

「子供の頃から、生き物が苦しむのを見るのが好きやった。猫を飼ってもらってわざと虐めたり、虫の手足を千切ったり。そんなことばかりしてた。うちにだけは優しくかったけど……。大きくなったら、今度は人間を虐めるのが好きになった。でも、私と違うて、姉ちゃんは、人一倍お父ちゃんあしらいがうまいから、何でもさせてもろうてた」

一気に話すと朱乃は息を継いだ。

「義兄ちゃんも、そんな姉ちゃんのことを嫌ってた、というより怖がってた」

「義兄ちゃん？寺井豪一の事やな」

朱乃は頷き、

「せやから、義兄ちゃんが、お父ちゃんに頼んでソフトの会社を作った時、姉ちゃんが面白そうやんか、って言うて、ちよくちよく会社に顔を出しても断れんかったんや」

九鬼は頷いた。それで充分だ。後は寺井を問いつめれば真相は分かる。

立ち上がって、ふと思いついて聞いてみた。

「朱乃は、姉ちゃんに似てるんやな？」

「写真でもわかるように、外見はそっくり。一卵性の双子やもん。ただ……」

「ただ？」

「手の甲の傷の位置が違うんよ。私は右手にあるけど……」

朱乃は赤いバンダナを取って右手を見せた。薄くなっただけはいるが、半円形の大きな傷がある。

「姉ちゃんは左手に同じ形の傷がある」

そう言って写真を見せる。

写真の少女の左手には同様の傷があった。

「今まで気がつかんかったな。でも、なんでそんな傷が？」

「小さい時、犬に噛まれたんよ」

三歳の時、二人して遊びに出て、犬に襲われた事があったのだという。

今から思うと、それほど大きな犬では無かったのかもしれないが、当時の二人にとって、それは、猛獣のように獰猛な化け物に見えた。

遅れる朱乃の手を引いて、美波は必死で走った。

しかし、貧弱な子供の足では犬に勝てない。

追いついた犬は、二人が繋いでいた手に噛みついた。

「幸い、近くでそれを見ていた人がいて、こちらはすぐに助けられんけど」

「けど？」

「姉ちゃんは、それ以来、すっかり性格が変わってしまった。悪魔になっただけじゃあな」

「よっぽど恐ろしかったんやな」

「さっき、美波姉ちゃんは悪魔やっただけで言うたけど、犬に噛まれるまでは、そんなことはなかったんよ」

そう言って、朱乃は手をつきだした。

「この傷のせいで、姉ちゃんは変わってしまったんや」

九鬼は頷き、玄関に行き、靴をはいた。

「すぐ行くように追いかけて朱乃が言う。」

「行くの？」

「寺井に話を聞かんならんからな」

「あかん。行ったら殺されるかもしれへん。義兄ちゃんはたいしたことあらへん。せやけど、お父ちゃんのためやったら何でもする、という鉄砲玉が、大勢、義兄ちゃんや姉ちゃんにはついてるんや」

「せやから言うて……」

九鬼は振り返った。

「ここで逃げる訳にはいかへん」

そう言い残し、朱乃を置いて九鬼は扉を開けた。

「待って」

振り向くと朱乃がさっきのバンダナを差し出して言った。

「持って行って。お守りに」

頷いて、バンダナを受け取ると九鬼は廊下に出た。

九鬼は、仕事で、以前に何度か寺井のマンションに行ったことがある。

ナンバ球場跡のすぐ裏という一等地に建つハイツ・ナンバの最上階、ワンフロア全てが、寺井の住maidだった。

光る大理石のフロアを横切って、エレベーターに乗り込む。

エレベーターを降りると、たちまち屈強な男達に囲まれた。

「九鬼周一さんですな」

そのうちの一人に話しかけられ、頷くと、そのまま前のドアを開けて部屋に連れて行かれた。身体検査される。

「どうぞ、こちらへ」

オーク材の立派な造りのドアを開け、応接間と思しき部屋に一人通された。

不思議と恐怖は無かった。ただ、真実が知りたかった。

「やあ」

しばらく待つと、ドアを開けて寺井が現れた。まるで緊張感のない顔をしている。

「久しぶりですな」

「ほんまや」

九鬼は硬い声を返す。

「せやけど、あんたは凄いな。いや、パソコンのパーツを追いかける能力から、もつときちんと評価すべきやったんやろうけど。たったあれだけの情報で、まさか、俺までたぐってくるとは思わなかった。おまけに……」

そう言つて寺井は下卑た笑いを浮かべた。

「朱乃はすつかり、あんたにいかれてしもたみたいやし」

「……朱乃は、最初から情報のために俺に近づいたんか？」

「そんなわけ無いやろ。未由佳の事が出るより前に、朱乃はあんたに会つとつたやんか」「ほんとうか」

「ちよつとは、あいつを信用したらんな可愛そうや。あいつは昔から変わった奴で、俺らとは全然違う種類の人間なんや」

「俺らつて、誰や？」

寺井は含み笑いをした。

「家だけは、オヤジの頼みで、あのマンションに住んどるけど、あとは全部自前や。朝から晩まで働いて、何が楽しいんか……」

「それが普通なんや」

「まあ、変わり者やが、俺にとっては可愛い妹や。血はつながってないけどな。大事にしたつてや」

「もう一人の妹、美波はどこや？」

「ここにはおらん」

「どこにいる」

「あんたには関係ないやろ」

「そうかも知れん。せやけど、俺は、ここを出たら警察へ行く」

「まあ、待ちいな。あんたと喧嘩する気はない。ただ、話し合いをしたいんや」

「人殺しとは話をせん」

「誰も人なんか殺してないで」

「八年前の小林未由佳は？ 阪田はどうなった？ 自然死か？ 自殺か？ 信じられんな」

寺井はゆつくりと首を振った。

「あれは……あれは俺も辛かった」

「八年前、俺は未由佳に夢中やった。せやけど、あいつは最初こそ、色々と俺の言うことを聞きよったけど、段々俺から離れて行きよった。『妖精の花園』が完成する頃には、もう毎日が喧嘩ばかりやった」
「それで殺した」

「殺すわけないやないか、ただ……部屋に閉じこめて言うことを聞かそうとしただけや」

「部屋？」

九鬼は呟いた。

「この隣の部屋をあいつに与えてあったんや」

「そこで軟禁したんか？」

「そうや、それで、ある朝、あいつの部屋に行ったら、冷とうなつとつたんや」

九鬼は寺井を睨みつけた。人が突然死ぬわけが無い。

「誓って言うけど、俺は、未由佳に手も挙げたことないで。宝物を殴るわけないやろ」

「宝物？人間はモノと違うで」

九鬼の言葉に寺井は怒りを爆発させた。

「モノで悪いんか？俺は金で小林未由佳っていう等身大の人形を手に入れたんや」

狂っている。そう九鬼は思った。子供の頃から欲しいものを何でも与えられた男の末路だ。

「美波がやりよったんや。俺はあいつに訊いてみた。そしたら、あいつは、最近手に入ったばかりのキノコの麻薬を食べさせてみた、と言いよった。適量も分からんと、大量にマジック・マッシュルームを食べさせよったんや。あいつ、未由佳を嫌つとつたし……」

寺井は口を歪めた。

「どうなるか、見たかったそうや」

「死体はどうした？」

「オヤジに頼んで処理してもらた。権力者は肉親に持つべきやで」

九鬼は胸が悪くなってきた。こんな奴と長い間取引していたのかと思つと、自分が情けない。

「言うとかけど、この話、あとであんたが他所でも、俺は知らんぶりするで。証拠は何もないんやから」

「美波はどこや？」

「あいつは、ここにはおらん」

「おらん？」

「知り合いの病院におる」

「怪我でもしたんか？」

「いや……」

寺井は奇妙に顔を歪めた。

「死んだんや」

「なんやて」

「アーパー娘の振りして、阪田にマジック・マッシュルームを食べさせに行つて、自分も食べよつたんやけど、量を間違えよつたんやな。ここに帰つてからショック症状が出たんや。あのクソキノコはものによつて、適量というのがまるで違うらしい」

寺井は溜息をつき、

「でも、俺はほつとしてるんや。あいつは恐ろしい奴やったからな」
九鬼に笑いかける。

「朱乃と同じ顔をしとつたけど中身は全然違う。あんた朱乃で良かったで」

「本当に美波は死んだんか？」

「ほんまやがな」

「それで、何もかも美波のせいにしてお終いか？」

「嘘やない」

「本当なんです」

背後から野太い声が聞こえた。

振り向くと、黒ずくめの男達に囲まれて、長身の白髪の老人が立っていた。肩幅が広く、血色の良い顔に銀髪がまぶしい。選挙のポスターでよく見る顔。矢野哲治だった。

「オヤジ！」

寺井が驚いた声を出した。

「何でここへ？」

それに答えず、哲治は九鬼に向かって言った。

「小林未由佳さんのご家族には、本当に申し訳ないことをしたと思っています」

「そう思うんやったら、なんで八年前に、なんとかしてやらなかったんや。せめて亡骸は家族に返すべきやろ」

哲治は首を振った。

「あの頃、私は、議員になったばかりの大切な時期やったんです。自分勝手な話ですけど、身内の不祥事で、それをふいにすることはできなかったんですわ。迷惑を掛ける方々が多すぎた。九鬼さん、お願いがあります」

「なんや？」

「全て忘れてくれませんか。全部の事件の実行犯やった美波は死んでしまいました。あいつは、あれでも私の実の娘なんですわ。忘れるために必要なお礼は充分に差し上げます」

「いらんと言ったら？」

黒服の男の一人が九鬼の腕を掴んだ。捻りあげる。

「……」

九鬼は必死で痛みをこらえた。

「金を差し上げると言うてはるんや、お前は黙って受け取って、一生口にチャックしとつたらエエ。お前なんか、この方の前では、ゴミ同然やねんからな」

さらに腕を捻りあげる。九鬼は叫んだ。

「また、そうやって俺を脅すんか？」

「また？何のこっちゃ」

腹にパンチを一発食らって、九鬼は悶絶した。

その瞬間、耐えていた恐怖が体の末端に走った。指先が痺れ、耳たぶが熱くなる。恐ろしかった。このままでは殺される。他人の為に、突っ張って殺されては何にもならない。

だが……九鬼の内部から声が出た。

他人の為……違う、自分の為なんや。

一度、逃げ出したら、歯止めがなくなって、二度とまっすぐに立てんようになる。もうすでに、俺は一度逃げてるんや。

それで親友を殺した。逃げたらあかん。

九鬼は歯を食いしばり、言った。

「殺すんやったら殺せ。俺はひかへん」

そして腹の中で続けた。

もう逃げるかい。わしはここで死ぬんじや。逃げっぱなしで生きるくらいやったら、ここで死んだ方がさっぱりする。

勝久、お前のどこへ行くで。

九鬼の腕を捻っていた男が哲治の顔を見た。

ふ、と哲治の顔がゆるむ。

「思ったより、ええ根性してるな」

目配せすると、男は九鬼の手を離れた。

服を整えてくれる。

「なあ、九鬼さん。あんたをここで殺すのは簡単や。でも、私は殺人鬼やない。人なんか殺したくないんですわ。それに、もしあんたがここで死んだら、私は阪田さんや小林さんの家族に何もしませんで」

「どういうことや？」

「あんたが生きてここを出て、黙っていてくれると約束したら、私はできる限りの事をお二人のご遺族にするつもりです」

哲治は静かに言った。

「阪田さんに家族は無いが、四国にお母さんが一人で住んでおられます。その方に、保険金という名目で五千万ほど渡そうと思っています。」

小林未由佳さんのご家族には、八年前から知り合いの寺で預かってもらっている位牌を渡して、何らかの形で保証をします」

「そんなことができるんか？」

「お前らと違って、そういう事ができる方なんや」

黒服がドスの利いた声で言う。

九鬼はしばらく黙っていた。

「俺は警察やない。また正義の為に仕事しているわけでもない。せやから、もし、あんたが、きちんと金を払い、やることをやるんやったら、それはそれでエエやろ」

安堵の色が哲治の顔に広がった。

「実行犯の美波が死んだのなら」

そう言って、九鬼は部屋を出ていこうとした。男達は止めない。

ドアのノブに手を掛けると九鬼は振り返った

「寺井。お前にはモノが有りすぎたんや。死んだ美波にもな。せやから歪んでしもうた。」

茶碗一杯の飯に事欠いて、腹一杯食べられることだけが楽しみやつた貧しいころに生まれてたら、お前らも違う生き方をしてたかもしれん……もう遅いけどな」

言い捨てて、九鬼は部屋を出た。

脳裏には、斉藤五郎の顔が浮かんでいた。

マンションを出ると、九鬼は新島の携帯電話に電話した。

新島は豊中にいた。

九鬼は、新島と梅田の喫茶コンゴで待ち合わせることにした。店内が広く、値段が高いために客が少なく、話がしやすいからだ。

先に九鬼が着いた。待つほどのこともなく長身の新島が現れる。

かいつまんだ話を新島にして、

「そういう始末になりましたけど、それでよろしいですか？」

新島は、ゆっくりと頷いた。

「もともと、誰かを裁くために始めた調査やない。年も経ってるしな。

もし未由佳に何事かあっても家族は諦めるやろ。ただ、俺は、きちんとあの娘を吊ってやりたかったんや」

九鬼も頷いた。

少しのあいだ躊躇して、言う。

「最後に聞きたいことがあるんですわ」

「何や？」

「引つかかっているのは、未由佳の友達の言葉なんです。背の高い中年の恋人がおった、という」

九鬼は新島を見た。

新島は目をそらさなかった。瞬きもしなかった。

そして、ゆっくりと話し出した。

「俺と未由佳の母親は大学の同期やった。恋人やと言うてもええ。せやけど、俺は就職した会社の社長から娘を紹介されて、その女と結婚したんや……」

九鬼は黙って聞いている。

「その女とはすぐに駄目になって、それをきっかけに会社も辞めた。ガルトップに再就職したのはそれからや……そして、俺は、九年前、昔の恋人にそっくりな女に出会って、付き合い始めた」

「それが小林未由佳……」

新島は頷き、

「付き合っただけでしばらく後、結婚を考え始めた頃、俺は未由佳の母親の名前を知った。昔の恋人や。まさかと思っただけで興信所に調べさせたら、未由佳の誕生日と母親の結婚の日付が一年以上もずれてた。未由佳は俺の娘やった」

九鬼は目を閉じた。

「俺は、引きちぎるように未由佳を切った。それまで愛おしかった気持ちだが、憎しみに変わった。急に父親としての愛情を持つてというのは無理やったんや。……俺は未由佳に心底惚れてたんや」

九鬼は目を開けて鋭く言った。

「それはあんたの勝手な理屈や」

「そうや、でも俺はたまらんかった。未由佳は、俺の罪が形を持って世の中に現れたものやった。俺は逃げた。ただ逃げた。だが、未由佳は、俺を追いかけて、毎日、日本橋に現れた……」

「おそらく、その頃、寺井とも知りおうたんやろうな」

新島は、拳を握りしめ、奥歯から押し出すように言った。

「わしはメンツにこだわって、娘を殺した男や」

「新島はん。あんた、前に、娘の両親にえらい迷惑かけたって言うたな。せやけど、それは違う。本当に迷惑かけられたのは、死んだ未由佳の方や」

言い捨てて九鬼は席を立った。

事務所に帰ると、朱乃が待っていた。

九鬼の姿を見ると飛びついて来る。

「あほ、死んだと思たわ」

眼の下で揺れる朱乃の髪から、いい香りが立ちのぼり、九鬼の心を締め付ける。

九鬼は天を仰いで呟いた。

勝久、俺、まだ死ねんわ。すまん。

事務所のメール・ボックスに、もう一通、死者からのメールが届いたのは翌日のことだった。

差出人は勝久の姉だった。

ナイフで封を破ると、手紙と黄ばんだ封筒が出てきた。

「拝啓 九鬼周平 様

先日は失礼しました。三回忌を済ませ、勝久の荷物を片づけていると、本棚の天文年鑑から、同封した手紙が出て参りました。宛名があなたになっていきますので、お送りします。

失礼とは思いましたが、先に手紙を読ませていただきました。

長い間、申し訳ありませんでした。ぜひ一度、うちにおいでください。父も会いたいと申しております。

山田美子」

封筒には薄い便箋が入っていた。

開くと、梅雨時にも関わらず、かさついた音がする。

そこには、勝久の懐かしく丁寧な文字があった。

「九鬼周平殿

この手紙を読んでいる頃、俺は北海道にいますと思う。

俺の北海道好きは知っているだろう？

本当は、直接言えば良いと思ったが、照れくさいので、古風だが手紙にした。

お互い、今回の事は良い経験になったな。お前が、苦しんでいることは俺も知っている。二人とも、経験が少なかつたのが失敗の原因だった。気にしないで、これからがんばろう。

黙っていたが、実は、俺はもう就職先を決めてある。ちよつときつい仕事だが、その分、あの程度の借金なら数年で返せるはずだ。

その前に、北海道に行つて、仕事の垢を落とすつもりだ。土産話を待っていてくれ。

追伸

お前が嫌だと言つたつて、俺は友達だぜ

山田勝久

読み終わって、九鬼は視界が滲むのを感じた。気づくと涙が流れていた。

止まらずに、ただ涙が流れていた。

勝久は、三年を経て、九鬼の魂を解放してくれたのだった。

その夜、九鬼は、一本の電話をかけた。

「はい」

聞き慣れた女の声が答える。

「俺や」

電話の向こうで体を硬くする気配がした。

「大丈夫や、この通り死んでへん。ちよつと怪我したけどな。そんなことより、すまんけど、もう一度この間の書類を送って欲しいんや。こんどはきちんと判をつけて渡すから」

「いいの？」

妻の声が柔らかくなった。昔、耳元でささやかれた声に戻っている。「もちろんや。それからな……まあ俺には関係ないことやが、今、付き合ってる男、あんまりええこと無いで。確かにお前のことは好いてるかも知れんが、危な過ぎるわ。深入りせん方がええと思うな。まあ、単なる老婆心やが。そしたらな。もう声を聞くこともないやろうが、元気でな」

電話を切った途端、妻の男に蹴られた脇腹が少しだけ痛んだ。

翌日、朱乃を誘って、九鬼はヤルスクで晩飯を食べた。

「九鬼はん、あんたも、今回は大変な『にぬき』商売やったなあ」

ヤルスクの店主が言った。

五郎には、だいたいの話は伝えている。

「かも知れへん」

九鬼が頷くと、

「にぬきの商売？なんやの、それ？」

朱乃が尋ねる。

「『煮抜いた卵』で『にぬき』、つまりハード・ボイルドつちゅうこ
とやがな、朱乃ちゃん」

五郎の言葉に、九鬼が間の抜けた声を出した。

「なんや、そういう意味かいな——俺はまた、生卵と違うて、指で回
したら、いつまでもぐるぐると落ち着きなく回り続ける、『ちょかち
ん』の意味やと思うてたわ」

「九鬼はんらしい」

笑いが食堂にあふれた。

朱乃をマンションに送りとどけた九鬼は、事務所に帰ると部屋を片
づけ始めた。

テーブルに置かれた赤いバンダナを見て、朱乃への思いに胸が熱く
なる。

机の上の封筒を持ちあげた拍子に、中身が床にこぼれ落ちた。上下
が逆さまになっていたらしい。

九鬼は舌打ちをして床にかがみ込んだ。

ドアの前で腕時計を見ると午前七時だった。

インターフォンを押すと、朱乃の声が答える。

「俺や」

「ちよっと待って、今開けるから」

しばらくして扉が開いた。

Tシャツにチノパン姿の朱乃が現れる。

「どうしたん？」

「すまん。寝てたんと違うか？」

「ううん。でも、どうしたん。こんな朝早うに」

「どうしても顔を見とうなったんや」

「なんで？変やわあ。これからずっと一緒に顔を見て暮らせるのに」

朱乃の言葉に九鬼は首を横に振った。

「いいや、それは無理や。お前は、病院に行くか刑務所に入るかのど
つちかやからな……」

呆然とする娘に九鬼は言った。

「美波」

「何を言うの？私は朱乃やんか」

「朱乃？朱乃は死んだ。お前に殺されたんや。今は病院の地下室で寝てるはずや」

「な、何で……」

「傷の位置や。本当の傷の位置は、お前が右で朱乃は左やった。あの画像データは、左右が反転されたものや。画像をていねいに加工したら良かったんかもしれんけど、これでも俺はプロの端くれやからな。気がつくと思たんやろ。せやから画像を全部反転させて、メールで俺に送った。それやったら、余計な加工の痕跡が残らんからな。阪田を殺して、あいつのパソコンから送ったんやろ。せやけど失敗したな。お前は、あの写真、左右対称やと思ってたんやろが、実はそうやなかった」

「何言うのん」

「お前は忘れてたかもしれんけど、あの写真で吉村社長は眼鏡をかけてる。しかもそれは境目がある遠近両用眼鏡やった」

「それが……！」

「わかったか？あの社長は、左目だけが極端に老眼が進んでた。せやから遠近両用レンズは左レンズにだけにはまってるはず。せやけど、あの写真では右レンズにだけにはまってた」

「嘘や。でたらめや」

言いながら、美波は手を祈るように胸の前で組み合わせた。

九鬼は苦い顔で娘を見た。

おそらく寺井や哲治は認めないだろう。

今となれば、彼らは、この入れ替わりを知っていたに違いない。傷の位置を家族が知らないはずが無いからだ。彼らは、危ない娘を九鬼に押しつけて、事件のもみ消しを計ったのだろう。

そして、半年後なり、一年後に九鬼は死ぬ……。

「疑問があれば解剖ができる。朱乃の死体は、まだ焼かれてへんからな。歯形から身許がわかるやろ」

「畜生。殺してやる」

突然、表情を変えてつかみかかった娘を、扉の影に隠れていた男が飛び出て押さえつけた。

「申し訳ありませんが、署までご同行願います」

「なんや、あんたら」

娘は叫んだ。

男は胸ポケットから出した警察手帳を示した。

「日本の警察はアホやない。阪田の事は自殺と発表してたけど、裏ではマジック・マツシユルムが原因とガンをつけて捜査が始まったんや。夕べ、俺が曾根崎署に行ったら、この刑事さんが丁寧に話を聞いてくれた」

九鬼は冷ややかに言う。

「まあ、警察でゆっくり話をしたらええ。お前が朱乃やったら、何の問題もないやろ」

パトカーに押し込められるまで、美波は聞くに堪えない罵声を発し続けていた。

遠ざかる回転灯を見ながら九鬼は思った。

これで矢野哲治は、阪田にも小林未由佳にも金を出さなくなるだろう。

俺は黙っているべきだったのかも知れない。

だが、朱乃を殺した女を許すことができなかった。

事件が終わって、九鬼の胸には苦々しい喪失感だけが残った。

「おやっさんは、今回の事件を『にぬき』ていうたけど……」

その夜遅く、灯りの消えたヤルスクで、九鬼は五郎と向かいあって座っていた。

「『にぬき』ってのは、期せずしてもう一つ意味があったんやな」

「何や？」

「卵は、にぬきにして皮をむいたら、そっくりで見分けがつかへん。

朱乃と美波もそうやった」

斉藤五郎は、黙ってカウンターの内側から、シチュー皿を運んできた。

「まあ、これでも食って元気出しいな。これは、わしが特別な客にか出さへんボルシチャ」

「どこが普通のボルシチと違うんや？」

「中に、白玉団子が入ってるんや。言うならばスイトン・ボルシチやな。『ロシア』と『日本』の両方がぎっしりつまったうちの裏メニユーや」

ひとくち食べてみると、思ったよりうまかった。

ふたくち食べると、喉を通り過ぎる暖かさが、胸の欠けた部分にゆっくりと広がって、九鬼の涙腺をやたらと刺激しはじめた。

了